

# 「<sup>お</sup>上山城<sup>ろ</sup>」からのたより 秋・第89便

## 伝 沢庵所用の一品

寛永四年（一六二七）、高德名僧への紫衣着用を許していた朝廷の権限を、幕府が無効とする紫衣事件がおこる。幕府と朝廷との対立、そして寺院・僧侶を巻き込んだ事件である。

沢庵宗彭はこれに強く抗議したので、寛永六年



（一六二九）上山に配流された。

当時の上山藩主・土岐山城守頼行は、松山の高台に庵を建て、沢庵宗彭を手厚く迎え入れ、沢庵はこの庵に「春雨庵」と名付け上山での約三年間を過ごした。その間、藩主・頼行は和尚から禅の思想に基づく行政や武道などの面で教えを受けている。将軍家光の時に赦免され上山を離れた後も、藩主頼行と沢庵の交流は続いたという。

沢庵宗彭（一五七三—一六四六）は但馬国出石（現兵庫県豊岡市）生まれの臨済宗の僧で、後に大徳寺の住持一五三世となっている。武道のみならず書画、詩文に通じ多くの墨蹟を遺し、茶道にも嗜む多才なお坊さんであったようである。

この染付茶碗は茶道を嗜んだ沢庵が所用したと伝わる一品である。中国・明時代（十五世紀）のもので、日本では呉須と呼ばれる藍色に発色する絵の具で絵付した陶磁器である。

ヒビに金継ぎしているところに風情が感じられ、この茶碗の飾らない素朴な風合いが沢庵らしさを醸し出しているような気がする。

（公財）上山城郷土資料館 学芸員 大場 浩子

【常設展示室から】二階第三展示室「沢庵コーナー」に沢庵直筆の書状を展示します（十一月末まで）。